

Title	フランスに於ける平價切下論に就いて
Author(s)	松岡, 孝兒
Citation	經濟論叢 (1935), 40(6): 1036-1053
Issue Date	1935-06-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/130595
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷十四第

行發日一月六年十和昭

論叢

藝術家と課税 法學博士 神戸正雄

民族と社會の發達 文學博士 高田保馬

農産物の生産調整に就いて 經濟學博士 八木芳之助

時論

日米貿易の調整 經濟學博士 谷口吉彦

研究

經營分析と經營統計 經濟學士 蛭川虎三

フランスに於ける平價切下論に就いて 經濟學士 松岡孝兒

百貨店出張販賣存續の條件 經濟學士 堀新一

說苑

統計圖表について 經濟學士 高岡周夫

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第四十卷總目錄

(禁轉載)

フランスに於ける平價切下論に就いて

松岡孝兒

一 序 言

フランスは今や世界大戰後第二回の本位貨危機に襲はれつつある。その第一回は周知のごとく世界大戰後一九二〇年より一九二四年乃至一九二六年に亘つて經驗され一九二六年の事實上の安定を経、一九二八年フランスの五分の一への切下によつて一應の解決を遂げた。其後フランスの經濟は比較的順調に經過し舊平價安定諸國の不況を外にして次第に生産の恢復、輸出の増進が行はれるに至つた。此の事情は一九二九年北米合衆國が取引所恐慌に襲はれた後も依然として繼續され、一九三一年イギリスまた本位貨恐慌に見舞はれるまで、フランスをして世界經濟好況國としてのその地位を保たしめた。

然るに一九三一年後はフランスに於いても漸次工業生産、輸出特に輸入、失業者に於いて顯著なる不況指數を示し、殊に一九三三年世界經濟會議不成立の必然的結果としてフランスを中心とせる金ブロックの構成されるに及んで、この勢は益々激しく、遂に一九三四年夏にはフランスに於いても亦切下論の提唱を見るに至り、ここにフランスに於ける第二の本位貨危機が出現するに

1) Cfr. S. D. N. Bulletin mensuel de statistique, No. 2, 1935, p. 58, pp. 66-71, pp. 95-96

至つた。就中、一九三五年三月末金ブロックの一環たりしベルギー、ついでリュクサンブールが金本位制を離脱するに至るに及んで、ここにフランス・フランの再切下問題は特に世界の耳目を集め、或はその極めて切迫せるを論じ、或はまた之に反論してゐる。

今結論的に云へば、私見はフランスに於ける經濟狀態にして、將來特別の事情が惹き起されざる限り、時間的に切下げらるべきものなりと考へるのであるが、併し今日の信認に於いては一部論者のごとく切迫せる事情にあるものとは思はない。蓋し前述せるごとく、フランスが一九二六年フランの事實上の安定を行つた後は、其の經濟復興特にその生産及輸出増加に極めて顯著なるものがあり、之によつて蓄積された資本は決して之を無視し得ない。しかも今日フランスの輸出は減じてゐるとは云つてゐるが、その割合が英米のそれに比して最も少いことは容易に推察されるところである。²⁾殊に技術的に見てフランス銀行の金所有高が一九三四年末に於いて八二一億を超えてゐることは、その輸入超過月平均の最高及び最低が一九三三年に於いて夫々一一億及び六億なりしものが一九三四年に於いて夫々八億及び二億に減じて來てゐることは、益々以つて貿易外勘定を無視しても尚ほ其の抵抗力の相當大なることを認め得るものである。

尚又其の切下ありとしてもその方法はイギリスの方法とは異なるのではないかと思はれる。それは貨幣價值下落に鑑み、切下率を決定して一舉に安定する方法によるのではないかと考へる。此の意味に於いてその安定方法がイギリスのごとく、金本位制を離れた本位貨が、政府の通貨政

2) Durand, J.: Le commerce extérieur de la France (Revue Economique Internationale, Mars, 1934, pp. 498-511); Internationale Wirtschaft—Goldstandard und Aussenhandel, Okt. 1934, S. 1-2.

3) Revue politique et parlementaire—Le Commerce extérieur(p. 180. Avril. 1935)

策によつて左右されるものと北區別される。尤も北米合衆國のそれのごとく切下率が示されるとして尙そこに一定の弾力性が残されてゐる型によるか否かは豫斷のかぎりでないが⁴⁾

以上は即ち問題としてここにフランス・フランを對象に取上げて吟味せんとする所以の理由であるが、以下先づ第一にフランスに於ける切下賛成論と切下反對論との主張を紹介し、最後に若干私見を述べんとするものである。尙ほ論述に於いてその意見を採用した代表者の選擇については一般傾向によつたものであつて、特にある立場を求めて行つたものではない。

ニ フラン切下問題に於ける二つの立場

フランス・フランの切下に關しては、これをめぐつて賛成論及び反對論の二つの立場が對立してゐることは前述せる通りである。この對立は或は議會に於いて、或は輿論に於いて明かにされたのであるが、しかし一般に云へば、現在のフランスに於いては切下論への關心の度は我國で發表されてゐる歐米電報の切下の急迫を示せるに比して薄いやうに思はれる。私は以下此の問題を取扱ふに當り、切下賛成論に屬するものとしてポオル・レイノオ、及びレイモン・バアトノオトルを、切下反對論に屬するものとしてリイル商業會議所、ユウジエヌ・マトン、R・P・デュシヌメン、シャルル・リストをあげ、此等の二つの對立的意見を順次述べることにする。

(一) 切下賛成論

4) Steels, J.: Les enseignements de la dévaluation monétaire aux Etats-Unis, en Grande-Bretagne et en Tchécoslovaquie (Revue Economique Internationale, Déc, 1934.)

(イ) ボオル・レイノオ説⁵⁾——ボオル・レイノオの切下論的主張は既に一九三四年七月議會に於いて發表され、藏相ジェルマン・マルテンとの間に論争が行はれたのであるが、其の特に耳目を衝

動せるものは、同年九月十二日及び十三日に亘り、エンフォルマシオン紙上に發表された謂はゆる三十六項より成る箇條書論文である。彼はアリアンス・デモクラチックの領袖の一人として一九三〇年にはタルディウ内閣に藏相となり、更に一九三一年より一九三二年に亘つてはラヴァル内閣の植民相となつてゐる。所屬政黨はタルディウと共に中央共和黨である。彼の主張の特質は、切下に就いて戦争デヴァリュエションと恐慌デヴァリュエションとを分ち、一部の人のデヴァリュエションに關する危惧は此等兩者を混同せるものに過ぎないものであると謂ふ點であるが、その内容の要領は次のごときものである⁷⁾。

「フランスに於ける恐慌の深化は、雷に農産物の販賣不能によるのみでなく、更に輸出の減少、特に漫遊客減少に關係してゐる。然るに最近世界の殆んどあらゆる國に於いて金平價が切下げられた結果、金本位更にはその舊平價の維持を圖りつつある金ブロックに於ける少數國の物價は、平價切下諸外國に對して騰貴すると共に、平價切下國の物價は金ブロックに屬する金本位國のそれに對し下落するに至つた。換言すればフランスのごとき金平價維持國の物價は金平價切下國に對し引上げられ、茲に國際市場に於ける貿易上、切下國は金本位維持國よりも一層有利な地位を有するに至つてゐる。

- 5) Reynaud, P.: Pour sortir du désordre monétaire (12-13. Sest. 1934. L'Information)
- 6) Germain-Martin: La doctrine monétaire du gouvernement (6 Juillet. 1935 L'Information)
- 7) Reynaud, P.: op. cit, 12-13. Sept. 1934.

茲に於いて問題は二つとなる。一つは、フランス・フランは金本位國貨幣にとつて高過ぎないやうにその平價を切下げざるを得なくなるのではないかといふ問題であり、も一つは、フランス・フランはその切下國貨幣に對する騰貴を相殺するため、國內物價水準の引下げに成功するだらうかといふことである。これ即ちデヴァリュエションかデフレエションかの問題であるが、ポオル・レイノオは此のうち前者を主張する「ものであつてこの點がフランスに於ける注目を惹くに至つたのである。

唯併し、レイノオの切下論は如何なる時、如何なる割合で行はれるかといふ具體性については何等觸れなかつた。その賛成理由も唯比喩的に「今日切下を行つた世界の四十九ヶ國に於いて、切下は生産者、國債所有者、債權者、債務者のすべてに有利な結果を齎し、それは恰も狹すぎるコルセットを外したとき全身が生き生きとなるかのごときものである」といふ。

之に對し反切下論者はデフレエション政策による國內物價引下の可能を主張し、更に切下の結果も各國民經濟自體の實際を吟味し、これによつて判斷さるべきものであつて、切下が一般的に妥當するといふ見方には加擔し得ないといふ。

(ロ) レイモン・パルトノオトル説¹⁰⁾——パルトノオトルはフランスに於いて數個の地方新聞を経

営してゐる。一九二八年セエヌーオアアズ縣より代議士として出で、一九三二年より一九三三年までエリオ内閣及びボンクウル内閣に經濟次官となる。獨立左黨に屬してゐる。彼の説は極めて

8) Reynaud: op. cit. 12. Sept. 1934.

9) Steels, J.: op. cit. p. 581. 切下を勧めんとするものは、まづそのものの状態の吟味より始め、全く異なる環境に於いて行はれた經驗には依頼し得ないことを論じ、良醫は患者の體質を診た後でなければ手當をしないといふ注意をのべてゐる。

複雑な論據によつてゐる。彼は已に久しき以來、金在高の數量的不足を信じ、複本位制への復歸を主張してゐた。彼は金價値の騰貴が商品價値の一般的下落に於いて表現されるかぎり、騰貴せるものは金の價値であると考へてゐる。故に彼の主張に於いては、フランは金と結合してゐるから、金價値の騰貴と共に騰貴するものであり、此の意味からフランは今日では一九二八年當時に於ける四スウの價値を有つてゐるものではなくて、七乃至八スウの價値を有つに至つてゐるものであり、此點よりしてフラン切下とは實際に於いて一九二八年のフラン、謂はゆるポアンカレ・フランに復歸せんとするものであるといふ。かくのごとき見地から見れば、彼の説はレイノオ説に比して消極的であると云ひ得られる。しかもこの切下説の全體的構成は、フランの購買力引下のため各種の手段を主張するものであり、問題は極めて廣い範圍に亘つてゐる。従つて此の觀點に於いてはフランス・フラン切下についてはレイノオの主張せる論據が最も積極的であり明瞭であるといつていい。そこでレイノオ説をば其の反對者の意見に對立させ、それら兩者の間に於ける對立を比較し検討することは一の興味たるを失はない。

(二) 切下反對論

(イ) リール商業會議所説¹¹⁾——リール商業會議所はフラン切下問題に關する反對意見を發表せる最初の商業會議所である。之によつて其後此の主張は漸次其他の商業會議所の賛成を得るに至つてゐるのであるが、その主張は次のごとくである。

フランスに於ける平價切下論に就いて

第四十卷 一〇四一

第六號 一〇五

10) Cfr. Patenôtre, R.: La crise et le drame monétaire, Paris 1932; — : Voulons-nous sortir de la crise? Paris. 1934.

11) Cfr. Nogaro, B.: Le problème de la "dévaluation" en France, (Revue Economique Internationale, 1935, pp. 48-52.

「一般にフラン金價值の法律による切下は、之により取引の繁榮を期待せしめ、フランス物價を一般切下國間の國際物價に修正し、更にはフランスに於ける生産費を遞減せしめ 生産の消化を容易ならしめることとなるといはれてゐる。併し切下によつて取引が活潑となるのは輸出に於いてのみであり、それも輸入原料の安い間の一時的現象に過ぎない。實際この希望の永續は頗る疑はしい。蓋し經驗上生産費は切下に應じて暴騰するからである。詳言すれば一方に於いて、外國よりの輸入特に原料の輸入は、切下關係に於いてその價格騰貴を惹き起すのみでなく、更に他方に於いても、國內的に生産費勞賃其他一般費用の加重を將來し、此等の事情は國內資本の對外逃避を惹き起し、かくて此等諸關係の赴くところは、遂にその欲すると欲せざるとにかかはらず、生産費の騰貴を惹き起さしめるからである。

しかのみならず、他方今日では貨幣的操作が經濟的膨脹を惹き起す時代はもはや過ぎ去つてゐる。その理由は、一たび貨幣的操作の結果が有利となるの傾向が起ると、諸外國は直ちに之に對し、關稅引上、割當強化、ダンピング抑壓、支拂手段制限等の政策を直接間接援用するに至るからである。故に一たびフランの切下が行はれるときは、それはポンド、ドル及び之をめぐる各國貨幣の對策的連續切下を惹き起す性質のものであるといふこと、之によつて物價も亦連續的動搖の波瀾に捲き込まれ、茲にその國經濟危機發生の虞を生ぜしめるものであるといふことも注意すべきであるが、更にまたフランの切下が、債務者殊に國家の負擔を輕減せしめ、惹いては契約の破

周知のごとく商業會議所は商工業者より成る。かくのごとき商工業者特にリイルのごときフランス北部重工業地區の商業會議所が、かくのごとき切下反對論を逸早く發表せることは、全くフランス的な特種現象と云ふべきである。

(ロ) ユウジエヌ・マトン説——マトンもまた北部工業地區にリイルと並ぶルウベエ市の商工聯盟の副議長地位にある産業資本家である。彼はまたフランス生産聯盟副總裁であり、其他ルウベエ織物シンデケト、羊毛中央委員會會長等の要職にある。彼の説によれば、フランスの切下は輸出産業にとつて刺激劑とはなるけれども、かかる利益は一層一般的な利害關係の前には斷念しなければならぬと説きたる點に於いて其の論據に一見識を示せる主張である。彼はこの主張を一九三四年八月十九日及び二十日のジュウルネエ・エンデヌストリエル紙に於いて「デフレエションかデヴァリュエエションか」なる題目の下に發表したのであるが、その主張は上述せる根據に基いて次のごとく展開されてゐる。

「凡そフランスの輸出は、單に貨幣制度にのみ依つてゐるものではない。貿易が制限されるに至る所以のものとしては、まづそが新興國の工業化によるものであることが考へられなければならない。更には貿易上イギリスの保護主義への轉向によるものであることも考へられなければならない。しかのみならず日本貿易の進出へも亦考慮を要する。尤も之は圓の切下のみに依るものではなくて、ソシヤル・ダンピングにもよることを考慮しなければならない。貿易の制限を將來する

調すべき國民性である。此點は Siegfried も亦「佛蘭西政黨概觀」に之に觸れてゐる。其の抄譯外務省情報部：佛蘭西に於ける政黨の特性(國際事情No. 346)參照

14) Mathon, E.: Déflation ou dévaluation? (19-20, Août, 1934, Journée Industrielle); Nogaro, : op. cit. pp. 52-54.

ものにはなほ以上の外爲替の不足、國際決濟の困難が擧げられなければならないが、此等の事情の背後にあるものとしては、結局工業販路制限に關する一般原因としての農業過剰生産が注目されなければならない。此點は恐らくフランの切下を以つてしても解決し難き難問であらう。¹⁵⁾

かくのごとくマトンの説は極めて控へ目ではあるが、單に流通部面への關心に止らず、深く之を規定し制約して無視することのできない生産部面に於ける客觀的事實にまでその考察を進めてゐる。このことは、一部主張への留保はあるかもしれないが注目すべき反對説である。

(ハ) R・P デュシュメン説¹⁶⁾——デュシュメンはフランス生産總同盟總裁たる外、フランス銀行理事、國際商業會議所副總裁、其他フランスに於ける商工業上に重要な地位を占めてゐる。彼は「フラン切下に利益ありや」なるパンフレットに於いて、此の問題に明瞭にして嚴密なる分析を加へてゐる。この主張はフランス政府側に於いても大體之を認めたものであり、結果的に云へば若干の本質的な論證には問題を含むものがあるとは考へるけれども、フランス・フラン切下反對論として最も重要な役割を果しつつあるものであるといふことができる。従つて以下彼の説を稍々詳しく述べる。

デュシュメンは、まづフラン切下の意義を外國で行はれた例について考察し、之をばフランス・フランの金分量を減することであると定義してゐる。

かくのごとき切下に於いて如何なる影響が惹き起されるかといふことは、デュシュメンも亦忘

15) Nogaro: op. cit. pp. 52-53.

16) Cfr. Duchemin, R.-P.: Y aurait-il intérêt à dévaluer le franc?; Nogaro: op. cit. pp. 54-62.

れなかつた問題である。彼によればまづ價格騰貴は輸入商品に必然的に起る。國內物價は生産者及び商業者により、フラン切下に對する防衛の理由を以つて割増される。但しこの點から以後は問題は心理學の領域に入る。蓋しフラン切下は從來一フランに含まれてゐた金分量の低下によるものであり、従つてそれは先驗的に購買力の減少を意味するものであるが、この過程によつてフランスに於ける切下は必然的に物價騰貴を惹き起すことになるからである。此點がフランス輿論特に政府に依つてその支持を得たところであり、それはまた従つては切下論をして不評ならしめた所以のものである。

彼は更にいふ、「大戰間並に大戰後を通じ、フランスはその最初から貨幣上に於いて防衛手段を採らなかつた。その理由はフランスの貨幣は常に安定して居り、信認されてゐたからであつて、従つて自國貨幣の下落に伴つて生ずる好ましからざる影響、例へば輸入品特に原料品の騰貴、生計費の増加に伴ふ勞賃の騰貴、投資の不安による金利の引上のごときことは考へなかつた。然るに大戰後幾何もなくしてフランは極めて顯著な下落を惹き起し、且又同様な變動をも隨伴せしめるに及び、フラン下落に伴ふ記憶は極めて生々しくフランス人の腦裡に残り、フランス人はその苦々しき經驗によつて切下は常に物價の異常な騰貴を伴ふものなることを心肝に銘じたのである。

かゝる事情にあるかぎり、フラン下落懸念の報告は商品價格を變へしめることになる。蓋し商

人はその在庫品價格を考慮せざるを得ないからである。そしてかかる恐怖によつて惹き起された物價騰貴は急速に一國內に波及し、その結果も亦無視すべからざるものとなる。尤も此際物價を騰貴せしめるものは賣手のみでなく、買手も亦之に參與するものであることは注意すべきである。かくて物價騰貴に當り、その騰貴に一層不安を感じるものは益々その買付を増加し、之と共にフランに對しては不信認の油が濺がれる。今日貯藏されてゐる銀行券は發行額八〇〇億フラン中少くも二五〇億乃至三〇〇億フランに達するといはれ、預金も銀行預金を控除せる貯蓄金庫預金は五五〇億フランに達してゐるといはれる。此等財産の所有者がフランの切下をそのまま承認するがごときことは到底考へられない。しかしもし此際フランの切下が行はれるときは、一九二四年乃至一九二六年の最悪期のごとく、フランよりの逃避を生ぜしめ物價をして愈々不安定ならしめるに至るべきことは容易に考へられるところである。

かくして切下が行はれるとき物價は騰貴する。そしてフランの價值下落は之に正比例する以上により大なる割合で示されるが、凡そこの問題の見透しはフランスでは全くかくのごとく過去の經驗に基き展開される」と考へられてゐる。¹⁷⁾

その過程を彼は次のごとく謂ふ。

「かくてデヴァリュエーションはその本來の目的を失ひ、フランスの輸出貿易はこれから何等の永續的利益を求め得なくなる。また國家信用に打撃を與へ、不信認及び投機恐慌が惹き起され

る。従つてフランスのデヴァリュエーションは勞賃引上の要求、次いでは社會鬭争をも生ぜしめる。このことは公債所有者にとつて新たな犠牲を強制するものであるが、一度この方向に向ふことは更に又インフレエーションを避くべからざるものとする。かくてデヴァリュエーションによつて惹き起された貨幣的動搖は引續きフラン下落を生ぜしめ、結局繰り返されるものはフランス銀行金準備の評価替より生ずるインフレエーションと新貨幣動搖とによつて深化される脅威そのもののみである¹⁸⁾と。

尤もかくのごとき考方はデュシユメンの一應の假定に基くものであることは勿論である。そこで彼は最近外國特に英、米、チエコ・スロヴァキヤに起つた事實を通じて此の主張を吟味してゐる。

已に述べたるごとく、デヴァリュエーションが一般物價を必然的に騰貴せしめることはフランスに於いては明瞭な經驗上の眞理であるとされてゐるが、イギリスに於ける實際はこれとは同様でない。従つてその理由が必要となる。デュシユメンは此點を説明して、「ポンドのデヴァリュエーションはフランスで考へられた反駁が示すやうな特性を有つてゐない。實際金本位制を放棄せるイギリス政府が導いた狀況は特種のものである。即ち第一にはポンド安定をばイギリスの貿易に有利だと判斷される比率以上に引上げることが止め、ポンドの變動をばむしろイギリス貿易に對して好ましい標準をめづつて維持せんとしてゐること、更に第二には、イギリスの貨幣政策には關稅政策が加味されてゐること、それ即ちその特性であつて、此等は何れも最近のイギリス經

18) Nogaro: op. cit. p. 57.

濟復興に與つて力あるものとして大いに認められてゐる點である」¹⁹⁾と謂ふ。

尙又アメリカの實際についてもその結果は反切下論者の主張とは異つてゐる。唯チエコ・スロヴァキヤの例に至つてはそれが謂はゆる即時的切下であり、物價は卸賣物價、小賣物價は勿論、生計費に於いてもすべて一様に騰貴傾向を辿つてゐるのであつて、是れは正にフランスの豫期せる事情の出現せるものである。²⁰⁾

以上之を要約すれば、デュシュメンはフランのデヴァリュエションを以つて物價騰貴を惹き起し、國家信用によつて不信認及投機恐慌が起り、固定收入者は新犠牲を拂ひ、勞賃引上要求は社會鬭争を生ぜしめ、インフレーションは不可避的となり、デヴァリュエションは更に追及されるものであることを主張してゐるものであるが、更にその各國に行はれた實際について吟味し、その結果は英米に於いてはフランスについて考へられてゐるものとは異つて居り、チェコスロヴァキヤに於いては一致してゐると述べてゐる。^{*}

(ニ) シャルル・リスト説²⁴⁾——リストはパリ大學教授として、また前フランス銀行副總裁としての主張はフランス金融の理論及び實際に於いて極めて重要な影響を有つてゐる。彼の地位と學說とよりして、彼が反切下論者であることは容易に考へられるところである。²²⁾併しリストは一九二八年フランの五分の一の切下を行つた當時フランス銀行副總裁であつたので、このことは如何なる理由によつて一九二八年にはフラン切下に賛成し、今日では之に反對してゐるのであるかと

19) Negro: op. cit. p. 59.; Steels: op. cit. p. 558. et. suiv.

20) Cfr. M. K.: Quels effets a eus la dévaluation tchécoslovaque (29. Août, 1934, L'Information); Steels: op. cit. p. 575. et suiv.

* Cfr. L'Information—Questions monétaires (17. Oct. 1934)

21) Rist, Ch.: Pour ne pas aggraver le désordre monétaire (19, Sept. 1934., L'Information)

いふ點に於いて問題を提出するものである。此點については彼は次のごとくいふ。

「一九二六年フランス銀行が政府と協定してフランの騰貴を事實上止め、次いで一九二八年之が法律上の安定を企てたときは已にポンド、マルク及びドルは安定してゐたのであつて、このことはフラン安定に對し一定の比較すべき標準を與へてゐた。然るに今日は之と異なる、よしんばポンドとドルが一應は安定してゐるとしても、マルクの支配者が如何なる方策に出るかば全然不明である。²³⁾ フランスはかくのごとき國際關係に於いて到底信賴し難き不安の下に束縛されなければならぬ理由はない。殊に一九二六年當時に當つては、世界に於ける金物價は徐々に下落しつつあつたのであるが、この傾向が將來も續くだらうといふことは一般に豫想されたところである。従つて貨幣價值の安定を徒に高位におくことは警戒しなければならなかつた。然るに今日世界物價水準の變動傾向は如何なる方向を示してゐるかといふに、一九二九年以來急落せる物價は今や停止せんとして居り、たとへばイギリスのごときに於いて現はれつつある傾向は騰貴への傾向を示してゐる。従つてかくのごとき場合貨幣價值の引下は認められない²⁴⁾」といふにある。

かくてリストは如何なる解決策を示してゐるのか。彼によればそれはアングロ・サクソン側に於ける國際關稅協定への參加であり、フランス側に於けるその貿易政策の變更であると謂はれる²⁵⁾。

三 結 言

22) Rist, Ch.: Déflation en pratique, Paris, 1924.; —: Essais sur quelques problèmes économiques et monétaires, Paris, 1933.

23) 前述 Siegfried: 佛蘭西に於ける政黨の特異性 (外務省情報部—國際事情346號) にも同様の主張がある。

24) Rist: Pour ne pas aggraver le désordre monétaire. (op. cit.)

25) Rist: op. cit.

之を要するに、フランス・フラン切下問題に關しては理論上原則的對立はない。即ち健全通貨説に對する管理通貨説の如きその成立の根據に於いて根本的に相反するがとき考方は存在してゐない。リストは勿論、デュシュメンにせよ²⁶⁾レイノオにせよ、²⁷⁾その主張の根底に於いてフランが金によるものであることは明かである。その主張の相違は切下論の代表者たるレイノオの主張が今日までの事情に於いて見るとき、デフレエションによるフランスの物價下落は尙ほ貿易上不充分であり切下國の金物價と比較するとき兩者の接近は容易でなく、しかも他方に於いて工業生産指數は減少し、輸出は退歩し、失業は増加するといふ事情に於いてはもはや、デフレエション政策はその限界に達したものであつて、これ以上の追及を許さないことを語るものであるとするに對し、反切下論の代表者たるデュシュメンに於いては、デフレエションの結果が有効に現はれ、その物價が他方逐次騰貴しつつある諸外國の金物價指數に接近するであらうといふ點から、換言すればフランスの物價は外國のそれに比して高くないといふ點から切下の必要なことを説いてゐるものである。

然らばかくのごとくフランスの金物價が切下國の金物價に比して高くないといふ論據に於いて此等のデフレエシヨニストの主張たる貿易増進の見地よりせる問題の見透しは如何なる方向に進んでゐるのであるか。即ち更にデフレエション政策を行ふことによつて物價の引下を考慮してゐるのであるのか、或はまた他の方法によらんとしてゐるのであるのか。此點に就いてデフレエシ

26) Duchemin: Question monétaire (17. Oct. 1934. L'Information)

27) Reynaud: Rapport sur la stabilisation à la Conférence internationale à Belgrade (18. Sept. 1934. L'Information)

28) Gerville-Réache: La couverture des échéances d'autonomie assurée par des Bons du Trésor à moyen terme (20. Sept. 1934. L'Information) 政府は昨年

ヨニストの意見は勿論これ以上のデフレーション強化による物價引下を意圖してゐるのではない。ある意味に於けるリフレエシヨンの對策さへ準備されつつある。²⁸⁾従つて結局解決はイギリスのごとき國の採用せる保護政策、特に關稅政策の緩和と共にフランスに於ける貿易政策の變更により、ここに國際貿易の振興を企圖せんとするにある。²⁹⁾このことはリストのごときも亦盛んに主張するところである。³⁰⁾

尤も切下問題に關しては、切下論者に於いても反切下論者に於いても考察は複雑である。切下論者に於いては、切下を以つて戰爭による切下と恐慌による切下とに分ち、夫々その原因の相違により結果が異ると主張してゐる。即ち戰爭による切下の結果は貨幣インフレーションの過度によつたものであり、物價騰貴を生ぜしめるが、恐慌による切下はデフレーションの過度即ち物價下落を原因としてゐる。然るに今日の恐慌デフレーションに於いて已に四十九ヶ國は何れも切下を行ひ、之に對して何等の遺憾を發表してゐない。恐慌に對し作用された手段中、如何なる政黨によつても非難されないものはただこのデヴァリュエエシヨンのみであるといふ。之に對し、反切下論者は大戰後のデヴァリュエエシヨンと今日のデヴァリュエエシヨンを區別し、前者に於いては物價下落の傾向にあつたから切下を行ひ、低き安定を必要としたのであるが、今日に於いては物價はむしろ上り傾向にある。従つて金本位制國は之に従ふ必要はないと説いてゐる。此點に於いても亦兩者の立場の相違による意見の喰違ひがある。

來、中期的大藏省證券の増發により政府貸上金の増加をはかれることは、ある意味に於けるリフレエシヨン政策への轉化である。尙 Cfr. X: La nouvelle émission de Bons du Trésor (Journal des Economistes Jan.-Fév. 1935. p. 53 et suiv)

29) Nogaro: Le commerce extérieur et les prix-or. (23. Août. 1934, L'Information)

30) Rist: L'Information, op. cit.

要するところ切下論者は四十九ヶ國が已に行つて不都合を感じず、切下は必然的にインフレーションを生ぜずとするに對し、反切下論者は、切下はインフレーションを生ぜしめると見るものであつて、此點に於いて貨幣政策上の信念と明識との對立を否定するわけには行かない。

尙ほ此等の賛否論者を見るに、賛成者は政治家であり、反對者に産業資本家が多いといふことも注目すべきであらう。併し産業資本家の側にも漸次切下説が現はれつつあることは新聞の報ずるところである³¹⁾。そして永き見透しよりすれば平價重壓に對する産業資本家の悲鳴更に重壓轉嫁を忌避する勞働者階級の號叫こそはまた正にフランス・フランが將來特別なる事情の惹き起さざる限り迫るべき運命ではなからうか。併し切下安定に至るには少くも英米佛間の國際協定を必要とするものであり、それは國際經濟會議の開催を前提とするものであるが、今日のところでは此の機運は未だ見込がない。

附 言

産業資本家の反切下論ある限り、見透的には兎も角、表面的には尙一應の餘裕あることを示すと見得る。ものではなからうか、フランスは經濟的に自給自足の色彩強く、對外輸出のもつ重要度も他の高度資本主義國ほどでなく、農民、小工業者の數また極めて多く、徹底的に個人主義的であり財産を重んずる國民であることは切下の將來を殊に困難ならしめるものであらう。此の意味で問題は心理的背景によるスペキュレーションと政治的要素にかかるのではなからうか。(一九三五、五、五)